無明逆流札

南條範夫

無明逆流れ

南條範夫

新潮社版

無明逆流れ

昭和三十二年七月二十四日　印刷
昭和三十二年七月二十八日　発行

定価二一〇円
地方売価　二二〇円

著者　南條範夫

発行者　佐藤亮一
東京都新宿区矢来町七十一

発行所　株式会社　新潮社
東京都新宿区矢来町七十一
電話東京(34)七一一一―九
振替東京八〇八番

乱丁・落丁のものは本社又はお買求めの書店でお取替え致します。

印刷　二光印刷株式会社　製本　新宿・加藤製本所
© by N. NANJO, 1957. Printed in Japan

目次

無明逆流れ……五
被虐の受太刀……三九
峰打ち不殺……六九
がま剣法……九九
相打つ『獅子反敵』……一三九
風車十字打ち……一七一
飛竜剣敗れたり……二一九

装幀

中尾進

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongboo

無明逆流れ

無明逆流れ

一

世に云う寛永御前試合なるものが、いつ頃から、何びとによって、如何なる経路を経て伝承されるようになったものかは不明であるが、それが史実にあらざることは明白である。

徳川実紀によれば、試合当日と云われる寛永十一年九月二十一日には、三代将軍家光は日光参詣中で、江戸に在城しない。将軍不在中に、吹上上覧所に於てこのような試合の行われるべき筈はないのである。

だが、この上覧試合なるものが、凡て全く講談師の張扇から生み出された虚構にすぎないかと云えば、必ずしもそうではない。多くのこのような場合におけると同じように、この試合についても粉本たるべき事実は存在した。

寛永六年九月二十四日、駿河大納言徳川忠長の面前で行われた駿府城内の大試合こそこれである。

この駿府御前試合は、そのままの形で世に流伝されることを禁止された。理由の一は、云う迄もなく、忠長が反逆の意図を疑われて領土を没収され、自殺の名の下に事実上切腹を仰付けられるに至ったからであり、他の一つは、この試合自体、空前絶後の残忍凄惨な真剣勝負であった為である。

泰平の時代にも真剣を以て試合した例は少くない。しかし、大国の領主が公けに開いた御前試合に於て、十一番の勝負を悉く、殊更に真剣を以てせしめたと云う例は全く他にない。

忠長が、多少精神に異常を来していたことを認めるとしても、秀忠から付属せしめられていた鳥居土佐守以下の宿将老臣が、この暴挙を諫止しなかったのは、意外である。恐らく、忠長の行動が既に部下の何人の制御をもきかぬほど常軌を逸するに至っていた事と、殺戮傷害を家常茶飯事とした戦国の時代を、ほど遠からぬ過去に持っていたと云う事情とが、この凄惨な真剣試合を、反対を押し切って敢行せしめたものとみるべきであろう。

試合の経過をみると、十一組の中、八組迄は、一方が対手を殺しており、あとの三組に於ては、両方の剣士が共に斃れている。寛永御前試合なるものが、同じく十一組の試合を挙げ、その中勝敗のあったものを八組、相打ちを三組としているのは、正にこれに倣ったものに違いない。

この試合中、城内南広場に敷きつめられた白砂は血の海と化し、死臭あたりに漂って、見物の侍の中にも、呻き声をあげて列を退き、ひそかに嘔吐するものがあった。だが、忠長は、蒼白の額に、青く静脈を浮上らせたまま、平然として終りまで見届けたと云う。

寛永十年十月、忠長が甲府に移された後、駿府城受取りに来た上使青山大膳幸成は、この試合の始終を聞きとると、眉をひそめて、

「先ずは天魔の所行じゃ」

と呟き、関係書類の一切を焼却せしめた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

従って、この試合に関する直接の公式記録は全く残存しない。ただ、当日、試合の席上に居合せた者のひそかに書き残したものが転々して、読み伝えられ、やがてかの寛永御前試合として、血風凄絶の史実とは全く別に、専ら大衆の耳を悦ばしめる興味主眼の講談と化したのである。

試合は、当日、巳の刻（午前十時）から始まったが、その最初の対戦者が、東西の幕を排して試合場に現れた時から、異常な緊張が席上をつつんだ。

東側に現れた伊良子清玄は、齢三十余り、稀有の美貌であるにも拘らず、両眼盲い右足が少しく跛をひいていた。幕内の試合場には、もとより入ってこなかったものの、この盲目跛足の美剣士に城内の試合場の幕外までつき添ってきたのは、同じ年配とみえる凄艶な年増女である。

一方西側に現れた藤木源之助は、年二十七八歳でもあろうか。清玄の神経質な俊敏な相貌に比べれば、やや重くるしい感じではあるが、より均衡のとれた秀抜な顔貌である。だが、彼も亦、左腕が、つけ根から無かった。

源之助にも、二十歳を二つ二つ越したかと思われる清楚な美女が、ついてきていた。先の年増の艶やかさは城内の若侍たちの胸に、悩ましい気な情感をほのかに湧き立たせたが、この美女の気品にみちた姿こそは、まことに眼をみはらせるものがあった。

二人の不具者と二人の美女。これだけでも列座の侍たちの好奇心を湧き立たせるのに充分であったが、どこからともなく、囁かれた噂が、口から口へと伝えたところによれば、この二人の剣士は、かつて同門の相弟子であり、伊良子清玄に付添ってきた年増は、二人の師岩本虎眼の愛妾、藤木源

之助と共にきた娘は、虎眼の一人娘で伊良子清玄の愛人であると云うのである。
この奇妙な縁に結び合わされた四人が、二人ずつ東西に別れ、その中の男二人が、互いに不具の身を以て、真剣を交えようとしているのである。
列座の者の、より多くの好奇心と興味とは、伊良子の方にあった。彼が盲目であったからばかりではない。藤木は今日始めて彼らの前に姿をみせた男であるが、伊良子は、半歳程前から、当藩の武芸師範岡倉木斎の邸に滞在し、その奇怪な「無明逆流れ」と称する剣法について、無数の噂が流れていたからである。
この秘剣をみたものは、主君忠長以下数名の限られたものに過ぎないが、正に言語に絶する妙技と伝えられていた。何よりも先ずその構えが奇警、人の意表に出るものと聞かされていた。
今、正面に向って恭しく一礼した伊良子藤木両名が向き合って剣を抜いた時、列座の人は果して、一斉に
「――あッ」
と、驚愕の叫びを発した。
藤木源之助が、抜き放った一刀を、大上段に構えたのに対し、伊良子清玄は、盲いた両眼を敵手に据えながら、同じく抜き放った一刀を、右足の指の間に、杖の如くつき立てたまま、凝然と佇立したからである。
それは凡そ一切の流派に、聞いたことも見たこともない奇怪な構えであった。

二

伊良子藤木両名の師岩本虎眼は、慶長末から寛永の初めにかけて、濃尾一帯に聞えた無双の達人であった。その初め、名古屋城下に現れた時は、さながら山男の如く、蓬髪垢面、片手にひっ提げた二尺三寸の薪雑棒で、無造作に各道場を破って城下を唖然たらしめたと伝えられているが、これは永禄の頃梅津某を薪雑棒で叩き伏せた富田勢源の事跡と混同された伝説に過ぎないらしい。

ともあれ、その剣技が絶妙であったことは周く知られており、晩年は門弟千人を超えていた。尤も、この数多くの門弟の中には、虎眼の一粒種、三重の、蕾のほころび始めたような初々しい美しさに惹かれて、見込みの少い剣道修業にやってきていたものも少からずあったことは間違いない。

だが三重の婿たるべきものは、衆目のみるところ、伊良子清玄か、藤木源之助か、何れか一人であろうと思われていた。岩本門下の一虎双竜と云われたのは、師範代をつとめる牛股権左衛門と、伊良子藤木の両名であるが、牛股は既に齢三十の半ばに達して妻帯しており、容貌怪奇の偉丈夫である。これに反して、伊良子藤木は何れも二十歳代で、独身である。

二人の力量は殆ど互角であったが、剣の技法には各々特色があって、伊良子は俊敏軽捷、藤木は荘重雄健である。師の虎眼は、何れかと云えば、藤木の技風をより多く愛したが、娘三重は、藤木の端麗な容貌よりも、伊良子の独特な悪魔的な美貌に気をひかれているらしくみえた。

「藤木の方が剣はまともだが、三重がどうやら伊良子に夢中らしいから、やはり、伊良子の方に決

めるかな」

虎眼は、盃を乾しながら、妾のいくに云った。五十に近い年でありながら、強靱な体軀と絶倫の精力に恵まれた虎眼は、妻の死後、何人も妾をとりかえたが、最近手に入れた松阪の商家の娘いくは殊の他、気に入ったらしく、初めから家に置いて朝夕の世話をさせていたのである。

「でも、跡をおとらせになるのでしたら、やはり、本当に旦那様のお目がねにかなった方の方がよいと思われます。――それに、お美しいと云っても、伊良子さまは、妙に怖ろしいような、女子の心を不安にさすようなところがありますし、藤木さまの方が、私なぞは、ずんと大人しやかに頼もしいように思われますが」

「うむ、わしもそう思うが、やはり若い娘には伊良子の方がいいらしいな、大体、きゃつの眼付は奇妙に悩ましいところがある。男のわしでさえ、時々、あいつにみつめられるとへんな気分になってくる。家中の娘御、女房衆は勿論、城下の町家の女どもの間でも彼奴は大変な人気らしいな、じっとみつめられると、骨がとけそうだと申しておるそうな、はは、権左が先日云うとった。きゃつ少しは羨ましい気ではあったがな。お前なぞも、そんな気がするか」

「まあ、私はもう殿方の眼つきに迷うほど浮ついた齢ではございませぬ。それより、旦那さまのお眼こそ、じっと睨まれると身動きが出来ぬと、門弟方がいつも云っておられます」

「わしのは、名前通り虎眼、鬼眼じゃ。見る奴は怖ろしくて金縛りになるのだが、伊良子のは、悩ましくなって、気が遠くなってくるそうな」

「そのような方ならなおのこと、お嬢さまのお婿さまとしては、よろしからぬと存じますが」
「はは、妙だな、お前は、ひどく伊良子びいきだったのが、此頃はすっかり反対になったではないか」
「あれ、そんなことはありません」
いくは慌てて打消して、盃に酒をみたしたが、その指先が微かに震えていた。
虎眼は、いくのその白く細い指先をじっと眺めていたが、急にキラリと鋭いものがその瞳の中に浮んだ。その視線は、いくの艶やかな首筋から肩へ、肩から腰へと流れていったが、ふと、何か新しいものをみつけたようにパッと輝き、やがて、底気味の悪い微笑のようなものが口辺に浮んだ。
数日後、虎眼が、門弟数名を連れて、浅間神社へ出かけた後、いくが、離れで、虎眼の衣類の手入れをしていると静かに部屋に入ってきたものがある。
「あっ、伊良子さま」
いくは、抑えた低い声でそう云ったが、眼にも、頬にも、隠し切れない悦びの色を漲らせ、くい入るように男の顔をみつめる。
「なかなか、よいおりがなくて」
清玄は、つとよりそっていくの膝に己れの膝を触れるように坐ると、両肩を抱いて、瞳を合せた。自分の瞳の妖しい魅力は充分に知っている。いくが、その瞳に射すくめられたように眼を閉じて、顔を上に向けると、その首に手を回して、自分の顔にぴったりとひきよせた。

しばらくして、二人が、もつれ合ったからだを引離すと、いくは、乱れた裾を気にしながら、紅潮した頬に、思い込んだ色を浮べて、

「伊良子さま、旦那さまは、いよいよ、あなたを三重どののお婿さまになさるらしゅうございます」

恨みと、哀しみと、嫉妬との入れ混った声で云う。

清玄もそれは予期していたところである。未だ蕾ながら、麗容濃尾第一と云われる三重と、師匠の後嗣の地位とは、もとより欲するところである。ただ、殆ど物心つくときから、まといついてきた女の匂いは、一日もそれなしでは済まされなくなっていたのだ。

師の女——悪いと知りながら、凄艶な年増女が思いがけなくみせた、純真とも云うべきひたむきな熱情に、ずるずるとひきこまれていたのである。

「清玄さま、どうなされます」

「うむ、一応お受けするより他はない」

「いやでございます。妾はいやでございます、あなたを他の女子にとられるのはいやでございます」

「と云うて、こなたは師匠の思いもの。もし、このような事が知れたら、私は師匠に斬られるだろう」

「斬られるなぞ——それより斬っておしまいなさいませ、旦那様は何と云ってもお年、あなたはお若い」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook